



幼馴染の○学生ショウタとユカリは、この日両親が温泉旅行で次の日までいないショウタの家で一緒に勉強していた。

ショウタには兄弟はおらず両親と3人暮らし。だからこの日はユカリと二人っきりだ。

勉強も一段落したので、二人は休憩することに。

そして色々な話をしている中で、二人は“ミルク風呂”に入ろうかという流れになった。

「そんなお風呂があるの!？」

興味深そうにユカリがショウタに尋ねた。

「親戚のおばさんが勧めてくれてさ!それからウチでは結構やっているんだっ!!」

“ミルク風呂”

といっても驚くような話ではない。市販の牛乳をそのままバスタブに溜まったお湯に入れる、それだけのシンプルな入浴方法だ。

「すごおい!!あたし興味あるかもっ!」

「じゃあさ……」

ショウタがちょっと悪戯坊主な目つきに変わる。

「久しぶりに一緒にお風呂入ろうぜっ!!」

ショウタの家の浴室はごく一般的な家庭の広さ。

浴室からパネルの引き戸を隔てた隣の脱衣所に二人がやって来た。

「……だけど……んうん……恥ずかしいなあ……」

「ここまで来といて何言ってんだよ!!」

急なショウタの提案に驚きを隠せなかったユカリだが、結局強引なショウタにやり込められて一緒に入浴することを決めた。

そしてここまでついて来たのだ。

「じゃあ脱ごうぜ……俺先に脱ぐかなっ!」

はりきって次へ次へと行動するショウタ。この日は興奮しているようでやけに積極的だ。

そして裸になり、そのまま先に浴室へ入ってしまった。

「ここにこれ全部入れるだけ。簡単だろ??」

ショウタは手に持った1リットルの牛乳パックを持ってユカリに言った。

「う・・・うん」

まだ照れくさいのか、うつむき加減でユカリが答える。

「ここにこれ入れて混ぜるんだ。じゃあいくぜ・・・」

コポコポ・・・コポコポコポコポ・・・。

白い液体が熱せられたバスタブのお湯に注ぎ込まれ、あっという間にお湯は真っ白になった。

そして、バスタブの真っ白に変わったお湯から低い天井に向かって立ち込める温かくて白い湯気を見ているうちに、ユカリはなんだかホンワカした心持ちに変わっていく・・・。

「これ・・・全部牛乳みたいだね・・・ショウタ」

バスタオルで胸元から下を隠していたユカリが、背中結び目を解き、そのまま体から引き剥がした。

バサッ！！

一瞬の沈黙。

そして・・・。

「ユカリ・・・おまえって、おっばいそんなにでかかったのな・・・」

照れたように、そしてやけに嬉しそうにショウタが呟く。

「ショウタのだってだよ？さっきからずっと見えてるけど・・・昔一緒にお風呂入ってた時のとまるで別物じゃん・・・」

二人の体は数年の時を経ただけで大人のそれへと成長し、変貌を遂げていた。

二人は体が熱くて仕方なくなった。

「んちゅ・・・ンムパァ！！はぁ・・・すっげえよ・・・スゲー。ユカリのお乳って。ほんとにここから母乳って出るのかなぁ??」

バスタブの熱いミルク湯に浸かり、乳房に吸いつきながら上目遣いでユカリの目を見てショウタは尋ねる。

「あはんっ！牛乳風呂で・・・んふう・・・何言ってるのよ！まだ出ないわっ・・・んんっ・・・だってあたしまだ〇学生よ！」

そう。

二人はまだあどけなさの残る〇学生。

ずいぶんと成長したが、まだ思〇期のはじめのはじめ。

それでも・・・背の伸びた二人の身体についているのは一人前に大人に近づいた性器なのだった。

———体験版はここまでです———